Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2012, Vol.22, 137-145

論 文

山下徳治における発生論の形成（３）
－ドイツ留学からソヴィエト訪問へ－

前　田　晶　子〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

Genetic approach in developmental ideas of Yamashita Tokuji (3)

MAEDA Akiko

キーワード：山下徳治、ペスタロッチ、新興ロシア、発達概念

１　ドイツ留学で何を得たのか

前稿では、山下徳治のドイツ留学中の学習傾向、とりわけ彼が傾倒したE. R. イエンシュによって彼の教育研究がどのように展開したかを検討した。彼はペスタロッチが提起した「直観」を教育の場で実践する際の心理学的基礎を、イエンシュの実験的方法によって得たと考えたのであった。後に書かれた文のなかにも、師範学校時代から続く自身の哲学的傾向に対して、「私の足は一向大地についていない」[1]という教育実践との乖離に自問し、ナトルプやイエンシュに従事しての研究はその脱却を図るためであったとされている。

しかし、帰国後、山下が引き続きイエンシュの研究に依拠したかというと決してそうではない。むしろ、イエンシュについて正面から論じたのは留学中の１論文[2]のみに留まり、マールブルク大学在学中の山下を知らなければ、イエンシュの直観像研究への没頭ぶりを低く見積もってしまうことになるだろう。このことは、改めて山下のドイツ留学の意味を整理する必要があることを示唆しており、イエンシュ研究が後景に退いた経緯ついて明らかにすることが求められる[3]。

山下のマールブルク大学での経験を振り返る上で、1930年代以降の彼の研究と運動に連なるものとして注目されるのは、以下の３点である。

(1) 帰国直後のペスタロッチ論
(2) 訪ソの経験
(3) 留学中の「デューイの発見」

本稿では、ドイツ留学中及びその後に書かれたノートを手がかりとして、特に(1)と(2)について検討したい。またこの検討においても、前稿までと同様に、山下の「発展Entwicklung」概念の内実を捉えるための作業として進めていく。

成城学園教育研究所には、森家によって寄贈されたものとして、山下（森）徳治と妻である森瑤子が所有していた刊行図書類の他に、４箱分の文書類が保存されている。文書は、留学中に収集したと思われる洋書類、ノート類、山下が寄稿している雑誌類、書簡、新聞の切り抜き、手書き原稿などが含まれ、その数は400点を超えるものである[4]。

その中で、山下自身が書いたと思われるノートが約20点ある。その一覧（部分）を示したのが末尾の表である。№14－19は留学中の語学の学習ノートであると考えられ、そのうち年代が判明しているものはすべて1925年前後のものであった（留学期間は1923－1926年）。他に、講義ノート、ペスタロッチやルソーに関するノート、心理学や児童学についての草稿があるが、一部には留学後に書かれた可能性が高いものもある[5]。

これらをもとに、1930年の新興教育研究所設立の前夜において、山下の発達研究―発生論的な人間学の追究―の展開を内在的に検討していきたい。

２　帰国直後のペスタロッチ論

山下は、ドイツから帰国後、『教育問題研究』とその後継誌となった『全人』に立て続けに数本のペスタロッチ論を書いている。最も早い1927年１月の２論文には、ドイツより戻り荷を解く暇もなく執筆した旨が付記されている[6]。

このように帰国直後に執筆した背景には、折しもペスタロッチの没後百年祭を迎えた1927年を目前として、雑誌の特集に執筆を要請されたことがあったと考えられる。また、彼の渡独の第一の目

的がペスタロッチ研究であったため、その成果を沢柳政太郎や小原國芳に対して示す必要があったことも容易に想像される。しかし、これらの論考では、彼がドイツで最も長い期間従事したイエンシュについては児童心理学の一人として紹介されるに留まり、次いで多く講義を受けたハイデッガーなどはその名前すら登場しない。

これらの論文の中心課題は、ペスタロッチの「自然」概念が、「自然衝動」と「道徳的法則性」の双方を「現実に於ける高き統一」としてつかんでいる点を明らかにすることに置かれている。コメニウスなど主知主義派の主眼は後者に子どもを近づけることにあり、逆にルソーは未開のままの自然のみを問題にしたのに対して、ペスタロッチの自然概念は「自然の理性化」「此方から彼岸への橋かけ」といった両者を結びつける性格のものであったという。

> そこに最も鋭く暗示してゐるものは此方から彼岸への橋かけである。決して彼岸から此方への架橋ではない。此の大地から天上への橋渡しであつて天上から大地めがけての橋渡しではない。自然の理性化であつて理性の自然化ではない。主知主義的教育は常に此の矛盾を冒して人類を個人主義的機械文明に導いて終つたのである。単なる技術的文明に陥りしは必然の結果である。[7]

そして、ペスタロッチのこの架橋の試みが現代では実験心理学において何より追究されているという。

> 新プラトン的に彼岸から此方の岸への架橋でなしに、却つて此方の岸から彼岸への架橋である。コペルニクス的転廻である。実にそれはアリストテレスや、ゲーテや、フェエヒナー的である。現代の心理学は其の意味に於いて、確かにコペルニクス的転廻を教育にも與へようとしてゐるかのやうである。[8]

フェヒナーFechner（1801-1834）に代表させて実験心理学への期待を語っているが、その中にイエンシュの名は殆ど登場しない。ところが、山下は1928年の二度目の訪ソの際に、ヴィゴツキーの下で直観像実験を行っていることから、必ずしもイエンシュ心理学への関心を失ったわけではないと考えられる。むしろ、成城小学校という場においてイエンシュ論を展開しづらい状況があったのかもしれない。いずれにせよ、ペスタロッチの自然概念こそが、子ども研究並びに人間研究を追究する際の要であることが強調されている。

さて、末尾表中のNo. 12は、日本語で書かれたペスタロッチ論の草稿である。山下はナトルプのペスタロッチ論を手がかりとして、ザイファルトの全集を中心に研究計画を立てていたほか、当時手に入りにくかったモルフのペスタロッチ伝を取り寄せて読んでいたという。また山下徳治文庫には、J. H. Pestalozzis Ausgewählte Werke[9]が残されている。No. 12はこれらを下に作成されたノートではないかと思われる。山下は、ペスタロッチの家系をさかのぼり、祖父や父母の影響について、推敲を繰り返しながら執筆を行っている。また彼は、ナトルプの『ペスタロッチの理想主義』を翻訳したり、ペスタロッチの翻訳にも着手していたようである。しかし、いずれも出版されるには至っていない。なぜ、山下のペスタロッチ研究はその後世に送り出されなかったのだろうか。当時の教育研究では、とりわけ1927年の没後百年祭を期にペスタロッチへの関心が高まっていたという[10]。その意味では、山下も数編の論考に留める必要はなかったのではないかと思われる。しかし、結局のところ、ペスタロッチについては、ここで取り上げた帰国直後の論考群のあとは、戦後の著作『ペスタロッチからデューイへ』（刀江書院、1950年）にようやく結実するまで、タイトルにその名が上がることはなかったのである。

さて、再び帰国直後のペスタロッチ論に戻ると、ここで注目されるのは、山下の心理学評価の内実である。前稿の終わりで彼が「身体的生長と精神的発展との調和的発展心理学 "Entwickelungspsychologie"」と述べて、発達概念を「発展」と訳出していたことを指摘した[11]。ペスタロッチ論においても、山下の「発展」理解は中心に位置している。

> 教育の本質は所与としてのプシュヘー〔魂－引用者〕が、身体的成長の直接作用に於ける精神発展の過程

に於ける芸術的創造に由る内面化であり、精神化である。[12]

さらに、非合理の世界であるプシュヘーに形式を与える理性や美を「内包的なもの」、プシュヘーを事実として客観化しうる側面を「外延的なもの」として、次のように説明する。

プシュヘーの発展の各々の階段は此の内包的 intensivな作用と、外延的 extensivな作用との直接的交錯に由つて生れて来るもので、決して一面的のものではない、此の意味に於いて教育は理性の哲学的透視性に由る人間学を必要とする。・・・而かも教育を内面的に考へれば考へるほどプシュヘーの個性の自律性を認めなければならぬ。[13]

ここから、山下の「発展」理解は、子どもの成長の源泉としての非合理性（ペスタロッチのいう「聖なる暗黒」）を十全に捉えながら、心理学の対象となる外的事実と、さらに混沌とした自然に内在する理性や芸術の契機を、人類史における前進をもたらす教育の人間学的プロジェクトとして位置づけられているといえる。

このように子どもの個体と人類の幸福を高次において統一する志向性をペスタロッチから引き出した山下にとって、もはや教育は学校教育に留まるものではなく、広く社会に開かれていくこととなる。しかし、このことは、即学校廃止論に向かうわけではなく、社会の一大事業として学校の役割を再定義する方向に進んだものと考えられる。山下がソヴィエトの新興の教育に求めたのも、そのような文脈から理解されよう。

3　二度目の訪ソの意味

山下は、二度に渡って旧ソ連を訪れている。一度目は、ドイツ留学中の訪問（1926）であり、二度目は帰国後の1928年冬の約一ヶ月半のことである。この二回目の訪ソでは、山下は、ルナチャイスキー、ヴィゴツキー、バッソフ、ボルンスキーなど心理学者や児童学者を訪ねている。また、「単一労働学校」にも訪問し、教育や制度の在り方を巡って議論を行っている。ちなみにこの際の費用は後藤新平の後ろ盾で工面され、帰国後に「労働大学」を設立する目的の下にあったが、後藤の死により実現しなかったとされている[14]。

この二回に渡る訪ソの間には、山下の帰国、沢柳政太郎の逝去（1927年12月）、成城小学校から自由学園への転任など、1920年の上京時には予想していなった展開が続いた。そして、訪ソを経て、1929年には、プロレタリア科学研究所教育問題研究会の責任者になるなど、大きく新興教育に向けて走り出す時期である。

この時期については、これまでも、いくつかの山下論においてその経緯が示され、また教育運動史研究においても論じられてきた。しかし、その間の山下の教育研究の展開―ナトルプから新興教育へ―はこれまで「断絶」として理解されてきた傾向が強い。井野川潔はリベラリストとしての山下がソヴィエト教育学に向かった経緯を明らかにしており、まさにこの点に迫ろうとしている研究の初期のものである[15]。しかし、ここでは、山下が自発的にではなく、周りから押し上げられて新興教育研究所所長になったという評価がなされている。その後の山下論も基本的にこのとらえ方を踏襲しているといえる。

そこで、本稿では、山下がソ連教育学やデューイの教育論などとの出会いを通して、ある種の組織的な教育構想を有していたのではないか、それは新興教育研究所の設立と無関係ではないが、まったく同じ方向性をもつものではなかったのではないか、という仮説を立ててみたいと考える。以下では、この仮説を下に、山下のソ連に対するスタンスを検討したい。

◇　◇　◇

さて、これまでの山下研究においても指摘されてきたことではあるが、彼は当初社会主義に対する懐疑を持っていた。それは、先に検討したペスタロッチ論の中に次のような下りがあることにも明瞭に現れている。

社会主義的教育は環境の影響のみを教育と認めてゐる。その事はプシュヘーのエンテレヒー〔魂の実現化－引用者〕を認むまいと努力してゐることであ

る。ロシア革命は実にかゝる一面のみを強く見た結果からの好き標本である。[16]

この文章から、留学から帰国したばかりの山下にとって、渡独中のソ連への訪問は、革命とその下での教育に対する批判的観点をもたらしていたことがうかがえる。

その後、山下が最初にロシアについて書いたのは、マールブルクで一緒だった長屋喜一（倫理学）への書簡という体裁をとった「海外通信　若きロシアとその道徳生活」[17]である。この長文の通信は、二回目のソ連訪問を伝えるものである。彼は、体操の研究を名目として半年間に渡り欧州に留まったが、その中で１ヶ月半をソ連で過ごし、後藤の紹介で多くの人物と会席している。またヴィゴツキーの心理学研究室の協力を得てイエンシュの考案した直観像実験も学校で行っている[18]。

この中で山下は、革命後の過渡期にあるロシアが、旧い伝統を排し、混沌とした状況の中から新しい道徳を作りだそうとしていることに強く感銘を受けたことを綴っている。その中でも労働する婦人の真剣さや献身性と、その背後にある宗教性に着目している。

さらに山下は、モスクワでヴィゴツキー宅にも足を運んだことに触れているが、そこでなされた若い学生との対話の中に、後の発育論争（1934年）と同形の議論をみることができる。

それは、山下が人間研究におけるder Mensch an sich（即自）とder Mensch für sich（対自）の二種の問いを出した際に、その学生が専ら環境的要因のみを重視し、前者については関心を持っていないと答えたことに対して、「責任の転嫁と回避に由る道徳の堕落」という危険性を孕んでいると述べているところである。そして、「人間の生長発展の原質的形態」を追究することは重要であり、それがロシアで追究されつつある道徳生活の新しい形なのではないかと指摘している[19]。

その後の発育論争においては、山下が前者の「発育するもの」（即自）の立場を主張したのに対して、他の心理学者が山下に対してロマン主義的発達観の持ち主であり、環境的規定を見ていないという批判を「発育されるもの」（対自）の立場から展開したことは周知の通りである[20]。山下が同形の議論をすでにソヴィエトで行っていたとなれば、ドイツ帰国から新興教育研究所創設を挟んでの1934年まで、彼の立場に大きな変化はないということになる。

この点について、山下の残したノートを下に、より詳しく検討したい。

４　新興ロシアへの共感と警戒

次頁に掲載するのは、No. 6のノートのうち、先の「海外通信」の内容と重なる部分のメモ４ページ分である。ここには、「海外通信」では分かりにくい山下の新興ロシアに対する二つの態度を読み取ることができる。筆者が付した丸数字の順に、山下の思考を追っていきたい。

①新興ロシアへの警戒

山下は、まず、自然と乖離した理論は、唯物論であれマルキシズムであれ、魔術的で恐ろしいと述べる。「ソビエット露西亜の名を聞くさへ厭はしいこと。恐るべきことのやうに思ふ。」として、マルクス主義をイデオロギーとして受容することを強く否定する態度が見て取れる。武者小路実篤やハクスレーの例を挙げながら、事実や「自然」の前に謙虚になることを促している。

②救済としてのペスタロッチ

続いて、日本における新教育、ドイツにおけるVersuchsschule（実験学校）の没落について、そこに同一の原理が働いていることを考察している。ここで、Mensch an und für sich（人間の即自と対自）問題が整理されている。特に興味深いのは、心理学の対象として先のペスタロッチ論で位置づけていたextensiv（外延）を対自（フュールジッヒ）に関わるものとして位置づけ、その構造を「子、母、人類、神」の順に示している。対して、即自（アンジッヒ）の方は、intensiv（内包）に対応し、「子、神、人類、母」として対自に対置している。どちらも子どもから出発することに変わりはないが、辿る道は反対に示され、彼岸の神を目指す方向と、此方の「聖なる暗黒」として広がる母に根ざす方向とが示されているのである。これは、おおよそ帰国後のペスタロッチ論をさらに展開しようとしているものと位置づけてよいだろう。

【資料】山下徳治ノート No.6（抜粋）

①

言葉は魔術的~~働~~力きをする。唯物論。唯物史観。マルキシズム　レーニズム
　ソビエット露西亜の名を聞くさへ厭はしいこと。恐るべきことのやうに思ふ。
　事実を見まいとすることは怯懦である！文化のあらゆる方面、学問芸術宗教に於て生産的であらうとするならば

日本に於ける民本主義者　武者小路氏の幸福者
　賢者も圧制者となれば愚人となる。
自然の発達過程に於いてはハックスレーが「自由教育学」の中に言っているやうに
　無知と故意の反抗と同視的に鋭く罰せられる。

自然の訓戒は人間の愛のやうに惇々として説がない。一言なしに直ちに横面を張る。
　然し人間は何の理由によつて横面を張られたかについて考へて見なければ
　ならない。それが人間に与へられた課題である。

②

日本に於ける新教育の没落

ドイツに於ける Versuchsschule の没落。

Why に就いて考へた。同一原理に由つて没落してゐる。

日本やドイツに於ける新教育没落の同一原理は又現代文化の各方面を支配して
　ゐるやうに思ふ。

没落の同一原理

a. Mensch an und für sich.　（偶然の意義）
　子、母、人類、神　extensiv für sich　Möglichkeit として在るもの　内在神
　子、神、人類、母　intensiv an sich　Dasein として在るもの　超越神

b. Theorie und Praktisch　アリストテレスの学問の規定。新オルガノン（ベーコン）
　(Triangel)　（生活“○○的”と~~指導~~原理的指導）
c. Erkenntnis und Methode (Technick)
d. 自然的関係と自然的関係の破れていく問題
それへの救済として<u>ペスタロッチに於ける人間の研究及び後の教育精神とその実際</u>

ペスタロッチ研究
- フレーベル
- ヘルバルト
- ナトルプ
- デレカート
- イエンシュ　<u>初めて人間学的立場より，</u>

③

ペスタロッチ教育思想はプラトーやカントや Neukanntianism に近いよりは
　オーガスチン、パスカルやマルクスやニーチェやディルタイや
　ジェームスに近い。
自然の発達過程に於ける
人間とその社会生活の研究に於て唯物的弁証法程　忠実に教へてくれたものはない
と思ふ。

唯物的弁証法かヘーゲルの Dialektik と区別されるのはマルクスも言ってゐるやう
に、ヘーゲルのそれは自然に於いては逆立ちしてゐると言つたことで充分である。

歴史主義の克服
　アリストテレス及びヘーゲルに於ける歴史の尊重と有在の歴史性の否定。

要するに私は神の人ペスタロッチの教育精神とその実際とを無神論的
唯物史観の立場からの新興ロシヤに於て<u>現象的に</u>、<u>実現せんとするのを見た。</u>
　既にその計画を部分的には実現し又将来に

④

然し茲には大きい問題が横はつてゐる。
　即　教育と社会組織との関係の問題である。
　教育は教育だけとしては考へられない。
I　それで若し或人か「ロシヤの教育は政治の宣伝機関になつてゐる」と云ふことを
　問題にするなら、それは余りにも当然であつて日本の学校教育か
　日本の社会政治組織に於て余りにも多く関係を持ち過ぎてゐるやうに。

　要はその現実の社会なり政治組織がどうかと云ふ根本的批判の問題か
　先行しなければならぬ。

II　◎理想と現実の相異

　社会的必然性、　個人的自由

他にも、アリストテレスのテオリアとプラクシス、認識と方法（技術）、自然的関係とその崩壊などの対比を取り上げながら、これらの二項対立が新教育の没落の基底に横たわっているとしている。そして、この問題への救済としてペスタロッチの「自然」概念の発見があり、またペスタロッチの道を歩もうとしている研究が列挙されているのである。ノートのこの部分は、山下の新教育に対する診断がロジカルに整理されているところである。

③唯物論の可能性

次のページでは、今度は唯物的弁証法に対する高い評価が綴られている。「人間とその社会生活の研究に於て唯物的弁証法程忠実に教へてくれたものはないと思ふ」と述べ、さらに「要するに私は神の人ペスタロッチの教育精神とその実際とを無神論的唯物史観の立場からの新興ロシヤに於て現象的に 実現せんとするのを見た」とまで述べている。おそらく、「海外通信」に記されたように、混沌から秩序が生起してくる状況を婦人労働の中に見ていた山下の感銘と重なるものであろう。

④教育と社会組織

しかし、と山下は警告する。唯物史観のもつ可能性は、教育の社会組織上の定位の問題に直面しているとする。すなわち、「教育が政治の宣伝機関になっているのではないか」という問題であり、日本の学校教育も共有する課題であるとしている。

この課題、すなわちノートの端に小さな文字で「社会的必然性」と「個人的自由」と言い換えられた問題は、これまでの山下の論考ではあまり取り扱われていなかった種類のものであると思われる。公立の学校教員を辞した山下ではあるが、成城小学校という特殊な私立の実験学校において教育を追究していた彼に、いつの時点で＜教育と社会組織＞というテーマが生まれたのだろうか。ドイツから帰国した彼を取り巻いた状況（沢柳の死や成城事件）と、二度目の訪ソがその契機となったのであろうか。

⑤唯物論とan sich / für sich

⑤

人間教育を、唯物的弁証法　或は唯物史観に於て厳密に、正しく
理解するならば、新カント学派、精神科学、現象学派から区別

1．唯物論をとるか唯心論をとるかの現実的根拠を究めなければならぬ
　a 感性（Sinnlichkeit）
　　三つ子の魂百まで。
　　武士道、禅、陽明学
　　音楽−芸術一般
　　Feuerbach に於ては尚消極的であつた感性に、aktiv な性格を
　　与へたのは Marx であつた。
　b 今日ドイツの Typologie
　　Werttypologie
　　(Spranger)
　　Somatische Typologie
　　(Kretzmer)
　　Jaenschsche Typologie
　c さきの Pestalozzi の例に於て extensiv な世界が根本にならねばならぬ。
2．人間とその社会生活に於ける自然生長性が重要視されそれとの関係に於て
　　目的意識性が考へられる。
　a 理念や価値からだけで規定されない。殊に出来上がつた理念と云うふものはない。
　　（固形化した理論、閉鎖された体系）
　b 人間やその社会を支配してゐる、経験や生活を通し知ることが重要事である。
　　自然生長性の実現を
　c 人間やその社会が一つの Struktur に於て研究される。
　　今迄の哲学がしたやうな論理的第一原理の理論と認識に役立つ限りは
　　於て他を ausschalten したやうなことは許されない。生長や発展をその
　　全体の姿に於て眺める。・・・・・
　　中條百合子
　d 従つて Erkenntnis が単に論理的でない。或は単に芸術的感傷的でない。
　　何よりも過程として認識する。
　e 従つて又 methodisch でなければならぬ。
3．個人的自由は社会的必然性の認識に於てのみ許容される。
　a 人間の存在を für sich に従つて Umgebung の問題となる。
　　人間の意識内容は規定されてゐる。an sich としての可能性は生活経験
　　に由つて規定されてゐる
　　（改ページ）
　b 氏より育ち
　　（以下空白）

pp.3-4

さて、次のページは、唯物論をペスタロッチ論に引き戻して、山下なりの方向性を示そうとしている生産的なメモとなっている。

まず第一点目は、唯物論といった場合の現実的根拠を、「感性」や類型学（シュプランガーの価値類型論やクレッチマーの体型性格論）に求めようという方向性が示されている。さらにペスタロッチのextensivが根本とならなければならないとしており、山下は、心理学の対象としての対自（フュールジッヒ）を唯物論の基礎とみたと考えられる。

第二点目は、人間とその社会生活を意識や論理の面においてのみ見るのではなく、「自然生長性」という全体性のなかで捉える必要性を述べている。その際の構造 Strukturや組織性 methodischが取り上げられている。ここに、1927年末からソ連に渡った中條（宮本）百合子の名前が挙げられていることも注目される。

最後は、先に挙げた「社会的必然性」と「個人的自由」の関係の問題である。山下は、ここで明確に、即自（アンジッヒ）としての可能性は、対自（フュールジッヒ）としてのUmgebung（環境）において問題とされる必要があると述べている。

ここで注意しなければならないのは、決して即自（アンジッヒ）は環境によってのみ規定されているとしているわけではないという点である。彼の理解は、対自（フュールジッヒ）によって即自（アンジッヒ）の自由が発揮されるというものである。「氏より育ち」という最後のページのメモにおいても、「海外通信」の該当箇所を辿れば、「可能的なるものは環境との交渉に於て初めて運動となり生長発展するのである」と述べ、さらに次のように環境や経験においてこそ自由が生まれることを述べていることでその真意が理解されよう。

> 環境とのかゝる関係に於ける因果法則は生命の発展過程に於ける現実的地盤を獲得して、更に未来の発展への生きた方法を準備する。換言すれば経験が現実を動かしてゐる法則を発見するのである。法則は自ら必然性を有つてゐる。かゝる必然性を予想しない如何なる自由もないだらうと思ひます。[21]（傍点－引用者）

ここには、すでに1934年の発育論争における山下の立場が明瞭に示されているといえよう。

◇　◇　◇

最後に、二度目の訪ソについて戦後に書かれた文章を取り上げよう。

> 彼（シャツキー）は、殆どコンムニストのいなかった教員層を進歩的なものに支えてきた人々はすべて自由主義者であったと彼らの功績を高く評価したあと、最後の言葉として、「リベラリストがいちばん強かった」と結んだ。私は沢柳先生を想い出し、深い感懐をもって彼の語るのに聞き入ったのであるが、今は党員である彼こそ、最も進歩的で強靭なリベラリストであったのである。[22]

これまでの検討から、山下は、彼のペスタロッチ研究の展開として、新興ロシアに期待と警戒の両側面からアプローチしていたことが分かる。彼は、当地の、何よりもリベラリストに寄り添おうとしたのではないだろうか。この点は、彼が後藤新平から期待されていた「労働大学」構想の具体とともに、稿を替えて再論したい。

5　小括 ～「デューイの発見」へ～

成城学園教育研究所の山下文書には、彼の経歴を示したいくつかの断片が残っている。その内訳は山下自身が書いたと思われるものと、聞き取りによって調査者が記録したもの各２編となっている[23]。

前者のうちの一つでは、ドイツ留学について次のように記述されている。

> 大正十一年　　ドイツ留学
> マールブルク大学で、ナトルプ教授の指導をうける
> ペスタロッチ研究のため
> ~~同時にハイデッガーヤスパースルドルフ・オットー~~
> また~~心理學学~~のエーリッヒ・エンシユ教授から心理学の講義をうける
> （ペスタロッチ研究の途上ペスタロッチの道のさきをデューイが歩いているのを発見する）
> ドイツ留学中にソ連の教育を見学

この記述は、マールブルク大学での受講状況がそのまま反映しているというよりは、むしろペスタロッチの道の先をデューイが歩いていることを「発見」したという箇所に強い印象を受ける。事実、山下は、当時ドイツの本屋にはなかなか置いていなかったThe School and SocietyとDemocracy and Educationを米国から取り寄せて読んでいたという[25]。彼のドイツ留学の意味づけ、及びソ連への方向づけにおいて、デューイの果たした役割は小さくなかったものと思われる。この点と、1930年代の新興教育研究所の立ち上げの過程が次稿の課題となる。

本研究は、文部科学省科学研究費補助金若手研究(B)（課題番号：20730509「近代日本の教育学と発達概念の展開」）の研究成果の一部である。

---

[1] 山下徳治『明日の学校』厚生閣、1939年、p. 46。

[2] 山下徳治「イエンシュ教授の心理学とその教育との関係について」『全人』第１巻第３号、1926年10月。

[3] このことは、イエンシュ自身の1930 年代以降の研究が直観像からより広く人格の類型論や民族心理学へとシフトし、そのことがしばしば人種的な偏見やナチのユダヤ人排斥に根拠を与えることにつながったこととも無関係ではないだろう。高橋和年『性格学概論』非凡閣、1951年、p. 90。しかし、山下自身が戦時中及び戦後に民族論を展開するようになることを考えれば、これが決定的な理由であるとは断言できない。

[4] これらの資料については、2012年2月に、筆者は金智恩氏（お茶の水大学大学院）とともに調査を行い、４箱分の目録を作成した。

[5] 宮崎俊明「山下徳治にみるドイツ教育学の受容問題」（『鹿児島大学教育学部研究紀要』教育科学編、第51巻、2000年）では、令息森礼治氏より借り受けた遺品ノートは16冊あり、そのうち講義ノートはブルトマン、ハイデガー、イエンシュのものなど1924年～26年までのものが約300頁に渡って残されているとされている。しかし、今回の調査では、該当するものを見つけることはできていない。

[6] 山下徳治「ペスタロッチの「自然」Naturについて」『教育問題研究』第82号、成城小学校教育問題研究会、1927 年１月、同「教育の本質より見たるペスタロッチ-の教育思想」『全人』第６号、1927年１月。

[7] 前掲「ペスタロッチの「自然」Naturについて」p. 47。

[8] 前掲「教育の本質より見たるペスタロッチの教育思想」p. 29。

[9] herausgegeben von Firedrich Mann著、Langensalza : Hermann Beyer & Söhne, 1906.（初版は1878年）。

[10] 寺岡聖豪「1920 年代日本におけるペスタロッチの影響」『福岡教育大学紀要 第四分冊 教職科編』55、2006年、同「山下徳治とペスタロッチ」『福岡教育大学紀要 第四分冊 教職科編』53、2004年。

[11] 前掲「教育の本質より見たるペスタロッチの教育思想」p. 29。

[12] 前掲「教育の本質より見たるペスタロッチの教育思想」p. 29。

[13] 前掲「教育の本質より見たるペスタロッチの教育思想」p. 31。

[14] 成城学園教育研究所所蔵の山下文書にある山下の年譜を参照。

[15] 井野川潔「山下徳治と新興教育」『近代日本の教育を育てた人びと』下、東洋館出版社、1965年。

[16] 前掲「教育の本質より見たるペスタロッチの教育思想」p. 33。

[17] 山下徳治「海外通信　若きロシアとその道徳生活」『倫理研究』1929年6月号。

[18] 森徳治「【記録】新興教育研究所創立当初の回想」黒滝チカラ編『日本教育運動史 第二巻 昭和初期の教育運動』1960年、三一書房、p. 109。

[19] 前掲「海外通信　若きロシアとその道徳生活」p. 109。

[20] 前田晶子「山下徳治における発生論の形成(1)」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第20巻、2010年、pp. 154-155。

[21] 前掲「海外通信　若きロシアとその道徳生活」p. 111。

[22] 前掲「【記録】新興教育研究所創立当初の回想」p. 110。

[23] 井野川が前掲「山下徳治と新興教育」を執筆するに際しての調査メモではないかと考えられる。

[24] 留学は1923（大正12）年であるが、初期の研究では、このメモに従ったのか、1922年とされてきた。

[25] 森徳治「ころび行く石」『自伝的教師像』（人の教育、第10号）松本浩記編、1956年。

【表】 成城教育研究所所蔵山下文書　戦前のノート一覧

No.	年代	日本語		ドイツ語		他の言語		紙片	備考
		頁数	内容	頁数	内容	頁数	内容		
1	1926	3	講演「児童心理学」目次	70	Philosophische Antropologie	1	（フランス語）P. Janet, Dumas, 等の名前あり	1（日・目次下書き）	山下がイエンシュの哲学的人間学を受講したのは1926年夏である。
2				5				1（独・メモ）	
3		2	大蔵経華厳部の写しと書き下し文	67	J.J. Rousseau「学問芸術論」のドイツ語訳の写し				
4	1921−1926	1	自作の川柳	19	書簡の下書き			1（独・書簡）	
5	−1926			9	書簡の下書き				
6		6	メモ	2	Zur Arbeit（詩）				訪ソの道中に書かれたものと思われる。
7		22	児童学に関する草稿						
8				19	″Brief″という題あり。ナトルプ婦人宛の手紙の下書き。				
9	1925			1		7	（ギリシャ語）An die Galater の題あり。		フォン・ゾーデンの講義のノートだと思われる。1925年冬である。
10		3	心理学に関するノート	13	Deutsche Grammatik formen und satzlchreの題あり。	6	（英語）子どものノートか？	2（小野島右左雄「現代の心理学」についてのノート）	
11				31	Deva= Bodhisattwa（Aryadeva）				
12		11	ペスタロッチに関する草稿		Pestalozzi				
13		60	翻訳（The school and society by John Dewey）					3（メモ1枚、原稿用紙2枚）	ノートの著者はHaruko Hatanoで、朱書きで訂正が入っている。
14	1925			21	サンスクリット語の学習帳				山下が初級サンスクリット文法を受講したのは1925年冬である。
15				28	統語論				
16	1925	1	表紙裏に自作の詩	32	語学ノート				
17	1926					8	（ギリシャ語）Für das Griechische の題あり。ギリシャ語の学習帳		
18						13	（ギリシャ語）Griechisch II		
19	1926			6	Vokabulare				

注）数字は頁数
No.は便宜上筆者が付したもの